

佐田峠墳墓群（第5次）の調査

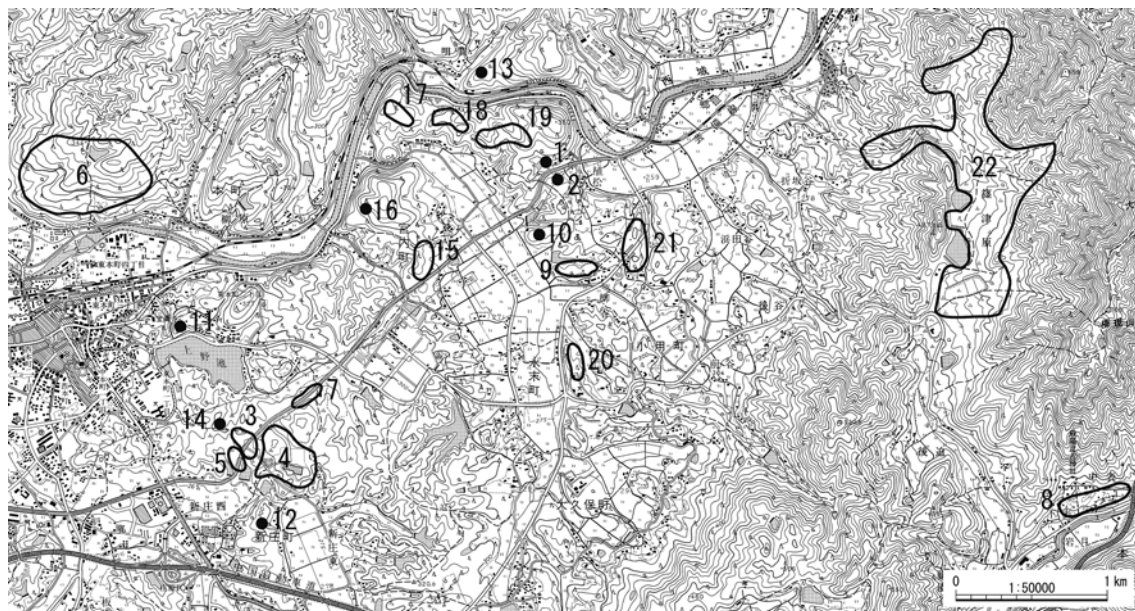
脇山佳奈・今福拓哉・
小森由佳利・野島 永

1. 位置と環境

佐田峠墳墓群は広島県庄原市宮内町佐田峠ほかに所在する。本墳墓は、庄原市市街中心地から市北部の西城町へと走る国道183号線沿いに北東へ4 kmほど離れた、西城川左岸の低丘陵上に位置する（第1図）。佐田峠墳墓群から南西2.5kmには、弥生時代中期から後期にかけて営まれた和田原遺跡群（藤田 1988、松井編 1999、稲垣編 2001、稲垣・今西編 2004ほか）がある⁽¹⁾。弥生時代中期中葉から後期にかけての住居跡が調査され、精緻な文様をもつ塩町式土器が多数出土した。本墳墓群の造営時期に一部併行して営まれた集落跡である。和田原遺跡D地点住居 SB04（松井編 1999）では鉄鏃が出土しており、その形状は佐田峠4号墓出土のものに類似するなど、佐田谷・佐田峠墳墓群との関係を考えるうえで興味深いものである。

また、同一丘陵上で隣接して佐田谷墳墓群が位置する。佐田谷1号墓は四隅突出型墳丘墓であり、木棺・木槨構造の埋葬施設をもつ最古級の墳丘墓であることも明らかとなっている（妹尾編 1987）。

（野島 永・脇山佳奈）

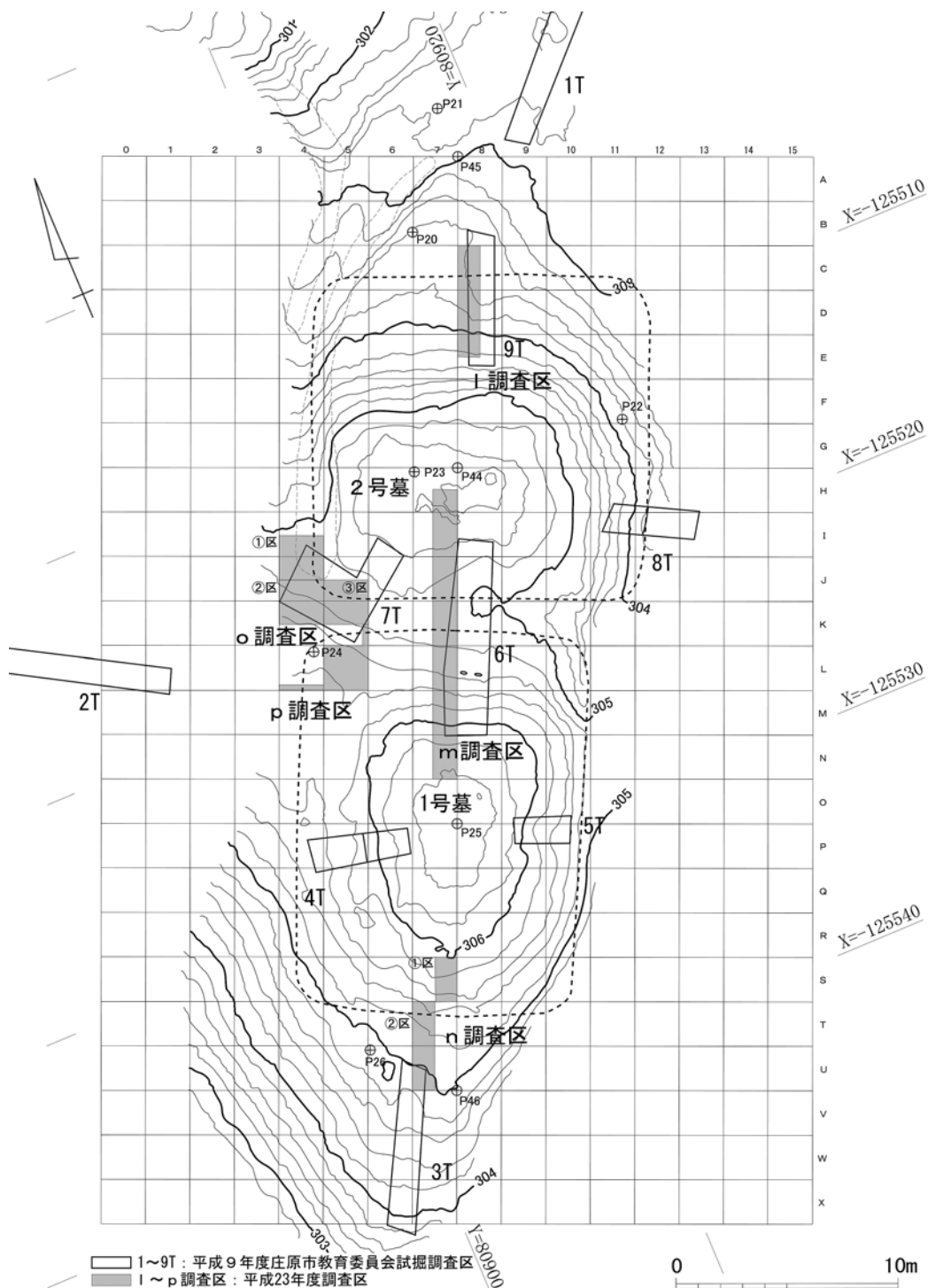


第1図 佐田峠墳墓群周辺主要遺跡分布図（1/50000）

1. 佐田峠墳墓群 2. 佐田谷墳墓群 3. 小和田遺跡 4. 和田原遺跡群 5. 西山遺跡 6. 御神田山遺跡群
7. 永宗遺跡 8. 鉾寄遺跡 9. 広政古墳群 10. 矢崎古墳 11. 瓢山古墳 12. 地王神社古墳 13. 唐櫃古墳
14. 牛塚古墳 15. 陰地古墳群 16. 殿島山古墳 17. 大歳古墳群 18. 山根古墳群 19. 寄藤山古墳群
20. 永末古墳群 21. 柳谷古墳群 22. 篠津原遺跡群

2. 調査の経過

佐田峠墳墓群周辺は江府三次道路建設に伴う一般国道183号（高道路）のバイパス整備計画の路線地内に含まれていたことから、平成9年度に庄原市教育委員会によって試掘調査が行われた。その際にA・B・C地区が設定され、A地区では1・2号墓、C地区では四隅突



第2図 A地区調査区配置図 (1/300)

出型墳丘墓（3号墓）、方形貼石墓（4号墓）、方形周溝墓と推測される墳丘墓（5号墓）も確認された。このため、庄原市教育委員会と広島県庄原土木事務所（当時）の調整協議によって、3号墓とその周囲の遺構確認部分が現状のまま保存されたという経緯がある。

昨年度までの調査は、庄原市教育委員会の試掘調査時の平板測量記録に基づき、C地区の3・4・5号墓の再確認とその詳細な記録の作成を目的とした。その結果、3号墓は墳丘規模16.5×10mで、弥生時代中期末葉から後期初頭の貼石・石列のある四隅突出型墳丘墓と判明した。4号墓も築造当初は四隅突出型墳丘墓であり、墳丘築造後に改変され方形貼石墓となったものと考えられた。墳丘規模は南北約8.1mと推定できる。また、4号墓西側では、4号墓よりもやや遡る可能性のある刳抜き式木棺と考えられる埋葬施設ST10を検出した。5号墓は一辺8mの方形周溝墓で、出土した土器細片より弥生時代中期後葉となる可能性が高い⁽²⁾。

以上のような成果を得て、C地区における調査を昨年度までに終了し、今年度からはA地区の1・2号墓の調査を行った。なお、平成19年度の測量調査の際に、A地区にはP.20～P.26の測量杭が設置された⁽³⁾。グリッド設定では、トータルステーションで1号墓墳頂部に設置されたP.25からP.23を視準し、そこから7度東に振り、P.25から16mに測量杭P.44、30mに杭P.45を設定した。さらに180度回転させ、P.25から12mに杭P.46を設定した。P.44・P.45・P.46を結ぶ線を中心ラインとしてグリッドを組んだ。庄原市教育委員会の試掘調査では、現地表に基準点のない簡易な平板測量（1/200）による調査区配置図しか作成されていなかったため、現状では過去の調査区の正確な位置が不明であった。したがって試掘調査区の詳細な位置を確認するためにも、小規模な調査区（1・m・n・o・p調査区）と一部重複するように設定し、墳丘形態・規模・構造を再確認することとした（第2図）。おもに1・o調査区を小森由佳利、m調査区を今福拓哉、n・p調査区を脇山佳奈が担当した。

なお、今年度も昨年度同様に猛暑を避け、8月下旬から9月中旬に発掘調査を行なうこととした⁽⁴⁾。（野島・脇山）

3. 1 調査区（第3図、図版第4）

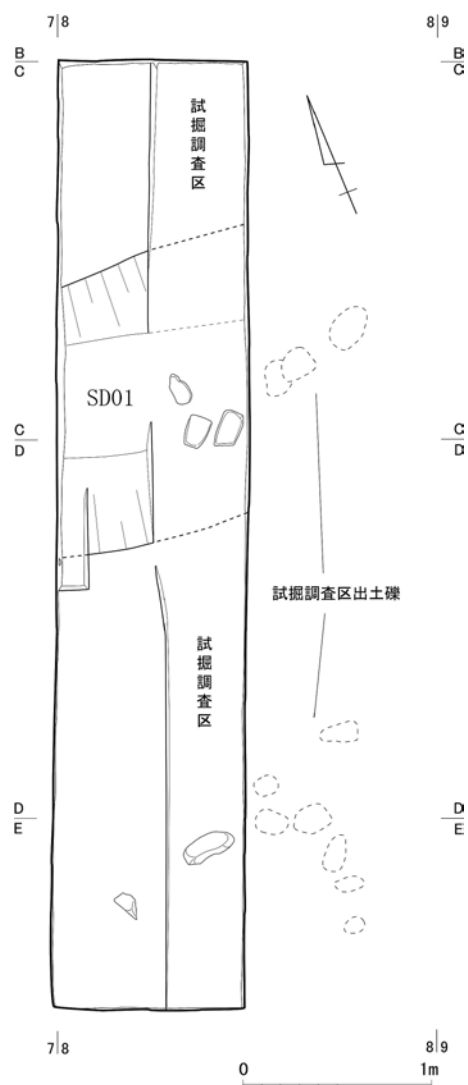
1調査区は2号墓墳丘北側の墳丘裾部・周溝・外表施設の確認を目的とした。試掘調査区（9T）から墳丘裾部が検出されており、この位置の再確認および記録作成を目的としたために1調査区を一部重複させた。1調査区では、7と8、BとCの間のグリッド・ラインが交差する点を北西端とし、東西1m・南北5mとした。おおよそ8-C～Eグリッド西側に相当する。

表土（第7図1、第1層）⁽⁵⁾を除去した段階で、1調査区南側の墳丘上に亜円礫2点および1調査区東半に試掘調査区の一部を検出した。また、1調査区中央北寄りに東西に延びる暗褐色土（第7図1、第3層）を確認し、周溝と推定した。これを、SD01とした。試掘埋め戻し土を除去し、試掘調査時に確認されていた角礫2点および亜円礫1点を暗褐色土の付近から再検出した。亜円礫については、原位置より動いているものとして取り上げた。この際

に、角礫2点が外表施設であるかどうかの判断ができなかったため、角礫を残して掘り下げなかった。続いて、SD01の埋土を掘削し北側肩部を確認した。南側肩部はこの段階では明確に把握できなかったため、1調査区西壁に沿って幅0.15mの断ち割りを入れ掘形の確認を行った。試掘調査時に墳丘裾部と想定された部分には東西に延びる周溝の掘形を検出することができた。周溝内からは遺物は出土しなかった。

調査当初、検出された礫の性格を判断できなかったため、1調査区外においてこれらに続く礫を確認することとした。1調査区より西側では調査区に沿って東西幅約1m、東側では東西幅約2mの範囲に10cm間隔でピンポールを突き刺して、礫の有無を確認した。その結果、試掘調査時に検出された同じ位置に礫が確認できたものの、これ以外の場所では確認できなかった。これらの礫は原位置を保っていない可能性が高いが、礫が集中して検出されたことに留意すると、2号墓では部分的な貼石が施されていたことも考えられる。

（1）周溝 SD01（第3図、図版第4b）



第3図 I 調査区平面図（1/40）

2号墓の北側に延びる溝で、最大幅約1.45m、検出面からの深さ約0.35mである。周溝 SD01内は5層（第7図1、第3～7層）に分層できた。下層の2層（第6・7層）は、堆積角度が異なり盛土同様の粘性がみられたことから、当初周溝内盛土と判断していた。しかし、調査後に第6・7層は南側に流れ込んだように堆積していること、溝内に盛土を施すような状況は他の調査区や遺跡においても類例がないことを確認した。このことから、角礫直下の2層（第6・7層）は、SD01内に流れ込んだ盛土起源の流土である可能性が高いと推測した。

2号墓の南側には周溝 SD02・周溝 SD04がm・o調査区で確認されている。SD02と SD04の周溝底面は標高304.6～304.8mである。一方周溝 SD01の底面は標高303.2mであり、SD02・SD04と比べ SD01の標高は1.4～1.6m低いため、2号墓南側と北側の周溝は連結しないものとする。

（2）盛土（第7図、図版第4b）

1調査区において2号墓を形成する盛土は、1調査区西壁の断ち割りでは地山まで掘削しておらず、詳細な検討を行っていない。しかし、2号墓南側のm調査区において盛土を1層（第7図2、第6層）検出したことをふまえると、2号墓北側である1調査区においても盛土を施していたと考えられる。

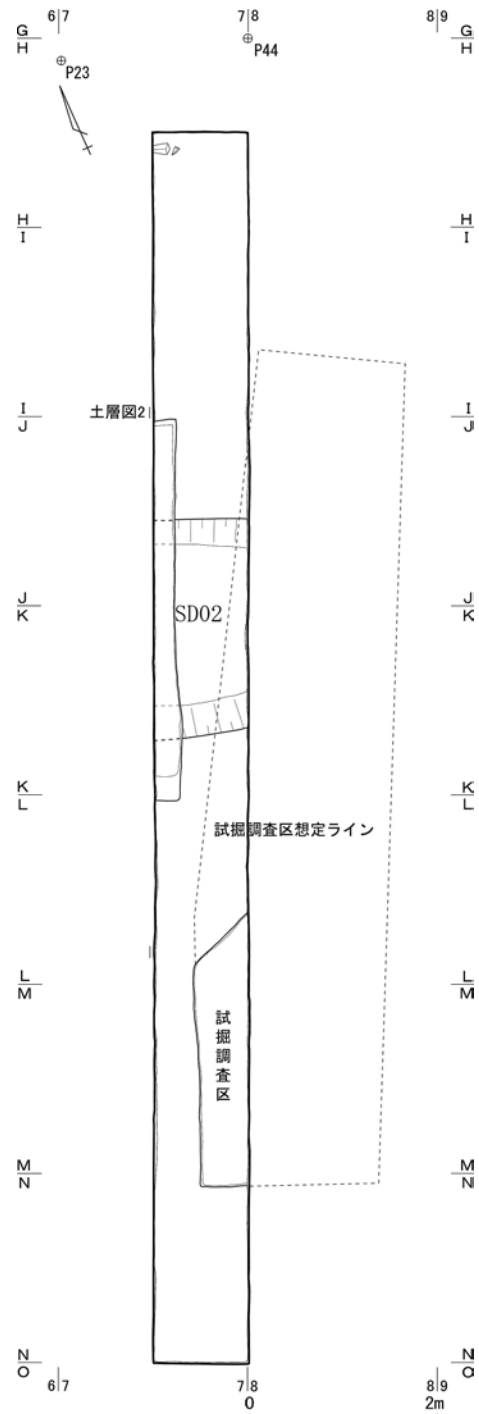
なお、今回の調査では、1 調査区の周溝内埋土（第7図1、第4層）上面が削平を受けていることから、周溝 SD01および1 調査区周辺はある程度削平されていたと考える。

（小森由佳利）

4. m調査区（第4図、カラー図版第2b）

1・2号墓間の谷部となっている地点では試掘調査の際に周溝が検出されていた。そこでm調査区ではこの周溝を再検出して精査することによって、1・2号墓の先後関係を把握することを目的とした。当初、本年度調査開始時に設定した7と8、GとHの間のグリッド・ラインが交差する点P.44を基準として北東隅と北西隅を設定し、測量杭P.25を基準として南東隅と南西隅を設定した。その規模は東西1m・南北8mとなっており、7と8、IとJの間のグリッド・ラインの交差点が北東隅となっている。なお、調査区は試掘調査の位置確認を行うために、試掘調査区（6T）に一部重複させる形をとっている。また、最小限の破壊にとどめるために、周溝に直交した細長い調査区とした。調査途中段階で1・2号墓の外表施設の有無を再確認するために調査区を拡張する必要が生じた。そのため、調査区北側に3m、南側に2mの拡張を行った。調査区はおおよそ7-H～Nグリッドの東側に相当する。

表土（第7図2、第1層）を剥いだ時点で試掘調査区の一部を検出した。同時に調査区内を東西に延びる幅約1.3mの黒褐色土の広がり（第7図2、第2層）を確認した。調査当初この第2層の広がりが周溝の幅であると判断し、これをSD02とした。SD02の堆積状況を確認するため、SD02を中心として西壁に沿って幅約0.25mの断ち割りを行った。しかし、SD02の掘形は不明瞭であり、本来の掘形がさらに南北に広がっている可能性が考えられた。そのため、断ち割りの範囲をさらに広げて確認を行った。最終的な断ち割りの範囲は約4mで、おおよそグリッド・ラインのJ～K間と



第4図 m調査区平面図 (1/80)

なった。この結果、幅約2.1mのSD02の掘形を確認するとともに、1・2号墓の盛土堆積の状況を観察した。

SD02の調査によって表土下がすでに盛土（第7図2、第6～8層）であることが判明したため、表土を剥いだ時点で掘削を停止した。試掘調査時に1号墓で検出されていた礫群は、今年度の調査区内では確認されず、礫群が広がる状況は認められなかった。また、2号墓墳頂部でも拳大程度の角礫2点が出土したにとどまった。この角礫の性格については盛土層上面で確認されており、3号墓でみられたような墓標石の可能性も考えられるが、少なくとも外表施設となりうるような礫群は認められなかった。なお、試掘調査区に関しては、一部が平面的に確認できるにとどまり、大半は検出できなかった。これは、既に上面が削平されていたことや、試掘調査時の掘り下げが浅かったことなどが原因と考えられる。ただし、SD02東壁の土層観察によって、東壁は試掘埋め戻し土であることが判明したため、試掘調査区のおおよその位置は推定できた。なお、m調査区からは遺物は出土しなかった。

（1）周溝 SD02（第4図、カラー図版第2b）

周溝 SD02は調査区を東西に走り、幅約2.1m、検出面からの深さ0.4m内外である。後述するo調査区内で検出された周溝 SD04から続く周溝であると考えられる。検出当初に想定していたSD02の規模は、周溝上面に堆積する埋土（第7図2、第2層）の幅と想定していたが、断ち割り調査によって、さらに南北に広がっていることが確認できた。西壁壁面の観察から、SD02の埋土は表土下4層（第7図2、第2～5層）に分層できた。

また、1・2号墓の先後関係を把握するため、調査区西壁の土層断面を精査したが、切り合い関係は確認できなかった。ただし、周溝内埋土最下層の第5層が1号墓より堆積していることから、1号墓が2号墓に先行した可能性も考えられる。少なくとも、SD02を共有していることから、SD02が埋没する以前に両墳墓がそれほど時期を隔てることなく築造されたと考えられる。

（2）盛土（第7図2、カラー図版第2b）

周溝 SD02の断ち割りの際に、1・2号墓の盛土の堆積も一部確認できた。1号墓では2層（第7図2、第7・8層）、2号墓では1層（第7図2、第6層）、それぞれ地山の上に堆積しているが、部分的に確認できたに過ぎず、詳細は不明である。（今福拓哉）

5. n調査区（第5図、図版第5）

n調査区は1号墓の南側であり、墳丘規模および外表施設の確認をするために設定した。1号墓南側には試掘調査区（3T）が設定されたが、測量図から試掘調査区内に1号墓の南側墳丘裾部はあたらないと推測した。そこでn調査区は試掘調査区よりも北側でその南西隅が試掘調査区と一部重なるように設定している。当初、n調査区は6と7、RとSの間のグリッド・ラインの交差する点を北西端として東西1m・南北8mの調査区を設定する予定であった。植林を避け調査区を南に2m移動させ、墳丘裾部を確認するための調査区を6と7、SとTの間のグリッド・ラインの交差する点を北西端として東西1m・南北4mで設定した。

ここは7-T・Uグリッドの西側1mに相当し、調査区名をn調査区②区とした。さらに墳丘斜面を確認するための調査区を、7と8、RとSの間のグリッド・ラインの交差する点を北東端とし東西1m・南北2mで設定した。7-Sグリッドの東側に相当し、調査区名をn調査区①区とした。最終的にn調査区は南北に総長6mとなった。

②区では、表土（第7図5、第1層）を除去した段階で、試掘調査区内の埋め戻し土と東西に延びる黒褐色土（第7図5、第2層）の広がりを確認できた。第2層は調査区外に延伸する状況が認められ、これを周溝と判断してSD03とした。試掘調査区の埋め戻し土を除去し、同時にSD03の掘形、および埋土の堆積状況を確認するための断ち割りを行った。西壁に沿って幅0.2m・長さ2mで設定した。SD03の南側掘形肩部を検出したが、北側掘形肩部についてはこの時点では明確に確認できなかった。そのため、さらに断ち割りを北に約0.2m拡張し、北側掘形肩部の再確認を行った。

②区において表土直下から盛土と確認したため、①区でも表土を除去した段階で掘削を停止した。①区・②区ともに墳丘上に外表施設は確認できなかった。なお、n調査区では遺物は出土しなかった。

（1）周溝 SD03（第5図、図版第5b）

周溝 SD03は②区の北側を走る溝で、最大幅約1.5m、検出面からの深さ約0.25mである。溝の埋土は3層（第7図5、第2～4層）が堆積する。SD03の南側の肩部では河原石2点を検出したが、貼石・列石のような角礫ではないことから原位置に据えられたものではないと考える。

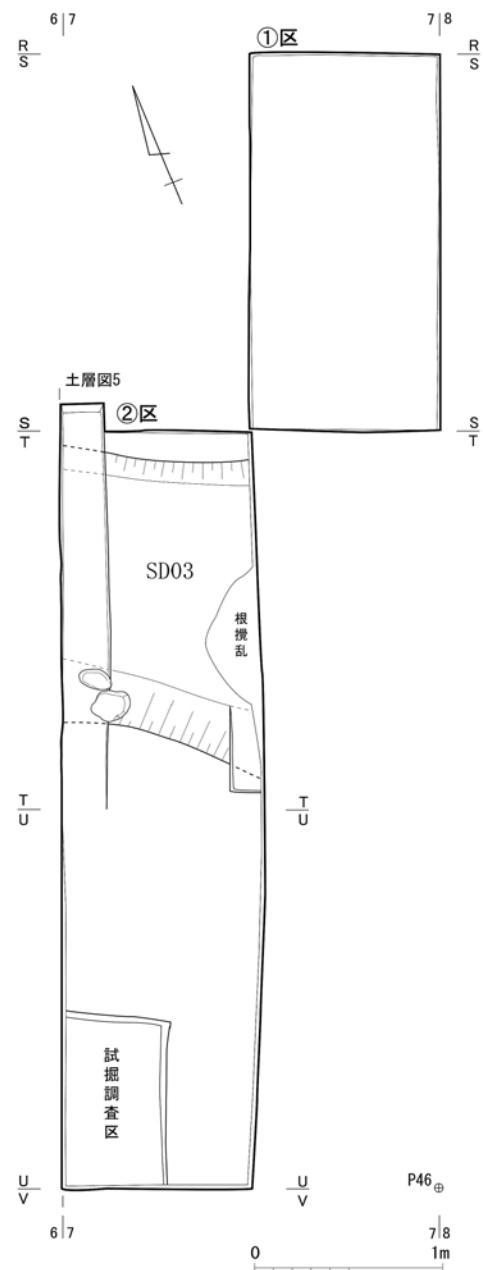
（2）盛土（第7図5、図版第5b）

周溝 SD03の北側では厚さ約0.2mの盛土（第7図5、第5層）を確認した。当初、この層は上下2層に分かれると考えたが、断ち割りをさらに北側に延ばし精査したところ、分層は難しいと判断した。

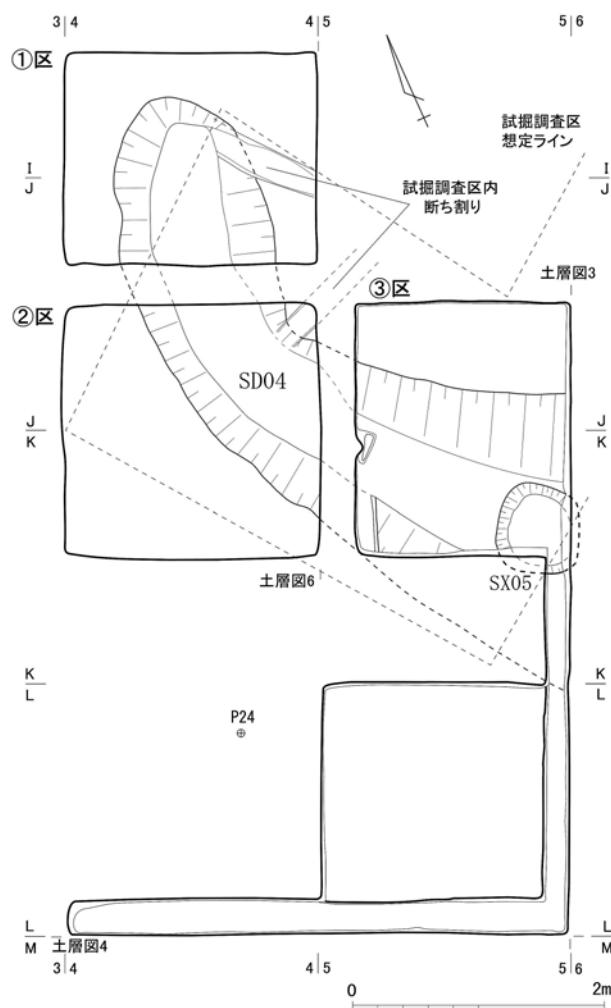
（脇山）

6. o調査区（第6図、カラー図版第2a、図版第6）

o調査区は試掘調査区（7T）で確認されていた2号墓墳丘南西隅部の精査を目的とした。計画



第5図 n調査区平面図 (1/40)



第6図 o・p調査区平面図 (1/60)

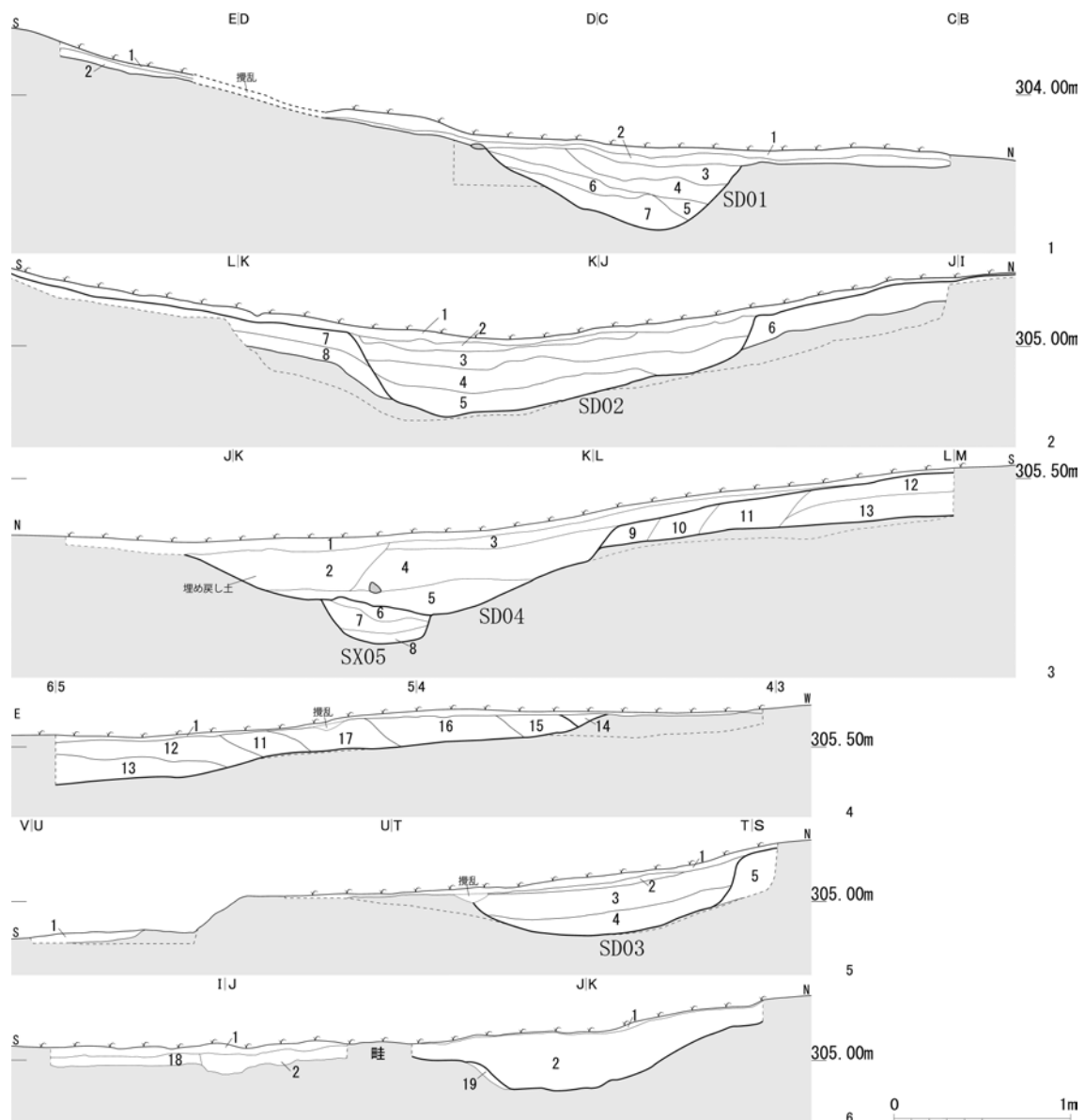
当初は試掘調査区に重なるように、HとI、3と4の間のグリッド・ラインが交差する点を北西端として4・5－I・Jグリッドの範囲に設定する予定であった。しかし、m調査区内で検出された周溝の位置を想定し、o調査区は1m南にずらして、L字形に調査区を設定した。これを3分割し北から反時計回りに①・②・③区とした。そして、①区南側、③区西側に土層観察用の畦を0.3m幅で設定し、掘削を開始した。

まず各区の表土（第7図3・6、第1層）⁽⁶⁾を除去した段階で、試掘調査時にも確認されていた周溝上面を検出した。これをSD04とした。①区では試掘埋め戻し土を除去し、未掘部分の掘削を行ったところ、SD04は調査区外に伸びず、①区内で収束することが判明した。②・③区においても、試掘埋め戻し土を除去し、SD04の掘形および2号墓墳丘南西隅部の検出に努めた。

墳丘南西隅部では、試掘調査時に設定

された二カ所の幅0.2～0.3mの断ち割りを再確認した。墳丘裾部の精査から、2号墓では隅部が突出しない形態であると判断した。SD04の掘形は①・②区では明確に検出することができたが、③区では掘形の南側肩部が検出できなかったことから、③区ではSD04の幅が急に広がると考えられた。このため、SD04と周溝SD02の位置関係や周溝の深さから両者は一連の周溝と推測することができた。しかし、SD02はo・p調査区近くで分岐し、それぞれ1・2号墓へ延びる可能性も考えられたため、③区東端の南北の断ち割りを拡張しその有無を調べることにした。その結果、SD04南側の掘形上端を検出したが、この他に周溝の掘形となるような土層は認められず、SD02が分岐して1号墓北西隅をめぐる周溝はなかったものと判断した。

③区では試掘埋め戻し土を除去したのち、南東隅で暗褐色土の堆積（第7図3、第6層）が認められた。第6層を精査した結果、炭化物と焼土を多く含む土坑1基を検出した。これを焼土坑SX05とした。当初、第6層はSD04の最下層埋土と考えていたため、SX05上面を一部掘削してしまった。



第7図 各調査区壁面土層図 (1/40)

なお、今回の調査では遺物は出土しなかったが、試掘調査時に2号墓南西周溝隅より弥生土器細片が出土しており、1点(第10図3)を図化した。

(1) 周溝 SD04 (第6図、カラー図版第2b)

周溝 SD04は最大幅約2.4m、検出面からの深さ約0.36m、墳丘南西隅部付近の幅約1mの規模を呈する。o・p調査区間の断ち割りにおいてSD04掘形の南側肩部が確認できた。③区東壁の観察から、SD04の周溝内埋土は3層に分層できた(第7図3、第3～5層)。SD04埋土である第3・4層と周溝SD02埋土の2層(第7図2、第2・3層)は、土質が類似していることや、底面の標高差が約0.2mとあまり差がないことから、これらは同一の周溝であると推測した。

（2）盛土（第7図6）

墳丘の調査では、試掘調査時の埋め戻し土直下から盛土と確認したため、この面に沿って未掘部分の掘削も行っている。①区東壁の土層壁面を観察したところ、盛土を1層（第7図6、第19層）確認できた。

（3）焼土坑 SX05（第6図、図版第6）

焼土坑 SX05は、③区南東隅の周溝 SD04で大部分が検出され、最大幅約0.8m、深さ約0.2mの平面形をもつ土坑と考えられた。

土層壁面の観察で SX05内には3層の埋土（第7図3、第6～8層）が堆積していた。埋土には炭化物・焼土がみられ、最下層の第8層からは炭化物が顕著にみられた。第8層中の炭化物を7点採取し、加速器質量分析法（AMS法）による放射線炭素の年代測定を行った⁽⁷⁾。このうち2点（試料 No. 5・No. 6）⁽⁸⁾ の測定が行われ、暦年較正による2 σ 暦年代範囲は、ともに657－715calADであり、7世紀中葉から8世紀初頭という実年代幅を得た。発掘調査時におけるo・p調査区間の断ち割り東壁の土層観察では、SX05より上層（第7図3、第4・5層）から掘り込まれている状況は確認できなかった。そのため、発掘当初はSX05がSD04と同時期、もしくはそれ以前に埋没したものと考えていた。しかし、上記のような測定結果を得たことと、SX05直上の第5層にも炭化物がやや含まれることから、SX05がSD04を掘り込んで7世紀中葉から8世紀初頭に再掘削されていたことを考える必要がある。SX05上層は大部分が試掘埋め戻し土によって覆われており、埋め戻し土の影響により土質が変化し層序を見誤った可能性が考えられる。ただし、1・2号墓の時期は後述するように試掘調査時に出土した弥生土器細片より、弥生時代後期前葉ごろと考えられ、SX05の年代と同時期とは考えがたい。

（小森）

7. p調査区（第6図、図版第7）

p調査区は1号墓の墳丘北西隅部および周溝の状況を確認するために設定した。本調査区を設定する段階で、m調査区の周溝 SD02が検出されており、1号墓と2号墓はSD02によって区画されていることが判明した。さらにSD02は西に延伸し、2号墓の墳丘南西隅部の周



第8図 m調査区作業風景（南から）



第9図 o・p調査区作業風景（北から）

溝 SD04と、1号墓の墳丘北西隅部をめぐる周溝に分かれるのではないかと推測された。したがって、SD02が1号墓北西方向へ延びる位置を予想し、5と6、LとMの間のグリッド・ラインの交差する点を南東端とする4・5-Lグリッドに東西4m・南北2mの調査区を設定した。

まずp調査区は1号墓の墳丘裾部が検出できる場所を推定し、東西2m・南北2mの5-Lグリッドの区画を掘り下げることとした。このグリッドを平面的に約0.15m掘り下げた時点で、グリッドの南東隅で黄褐色土、その北側に暗褐色土を検出した。この黄褐色土の広がりが1号墓に付随する盛土、暗褐色土の広がりが周溝内埋土ではないかと推測したが、平面的に明瞭な周溝のラインを確認できなかった。そのため、p調査区の東壁と南壁に沿って断ち割りを設定し、SD02から西に延伸する溝の形状を東壁・南壁の土層の観察から把握することとした。東壁は幅約0.2m・長さ2mの断ち割りを設定し、最終的にはp調査区からさらに北に1m伸ばし、o調査区と連結する断ち割りとなった。p調査区南壁は5-Lグリッドの南に約2mの断ち割りを設定し、さらに西に向かって2m拡張し、総長4mの断ち割りとなった。壁面の土層観察で、南壁沿いの断ち割りでは、盛土の堆積（第7図4、第11～13層、第15～17層）⁽⁹⁾を約3m確認した。第15層の西に堆積する第14層は地山に似たバイラン土を含む層である。他の層と比べしまりが弱いことから、この層は盛土ではなく、自然堆積土であると推測した。東壁沿いの断ち割りでは、南側を約0.2～0.25m掘り下げた段階で地山を確認したため、さらに地山面に沿って北へ掘り下げた。また、東壁では南から約2.0mにわたって盛土（第7図3、第9～13層）を確認し、同時にSD04の南側の掘形肩部を盛土（第7図3、第9層）の北側から検出した。

盛土（第7図3・4、図版第7）

p調査区南壁および東壁において墳丘内の土層の状況を確認することができ、南壁は盛土を6層（第7図4、第11～13層、第15～17層）、東壁は盛土を5層に分層した（第7図3、第9～13層）。

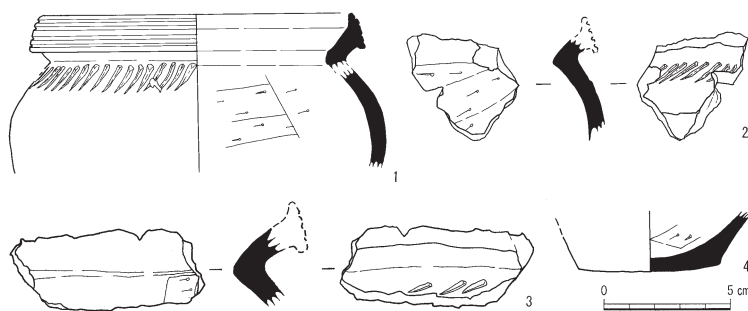
墳丘の構築は、地山直上に旧表土が認められないことから、最初に地面を掘削し、その後、地山面を平らに整地するための部分的な盛土（第7図3・4、第12・13層）を施したと考えられる。平らに整地した上に、南壁では東上方から西下方、東壁では南上方から北下方へ盛土（第7図4、第11・15～17層・第7図3、第9～11層）を施している。この角度のある盛土は墳丘隅部の堆積を示していると考えられ、この付近に1号墓墳丘隅部が存在するものと推測する。

（脇山）

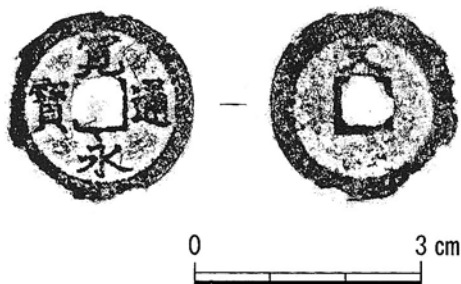
8. 出土遺物（第10・11図、図版第8）

（1）弥生土器（第10図、図版第8a）

今年度の調査では弥生土器は出土しなかったが、庄原市教育委員会による平成9年度の試掘調査において70点以上の弥生土器細片が出土している⁽¹⁰⁾。2号墓南西周溝隅の土器片1点（第10図3）、1号墓の土器片3点（第10図1・2・4）について紹介したい。



第10図 佐田峠1・2号墓出土土器（1/3）



第11図 佐田峠1号墓表採銅銭（1/1）

甕形土器 1は復原口縁径は約12.4cmであり、口縁部は上下方向に拡張し、口縁部は上方に向かってたちあがる。口縁部には4条の浅い凹線が施されている。胴部最大径は上半にあり、復原胴部径約14.8cmである。体部は丸みを帯びている。頸部直下には列点文が約5mm間隔で施される。色調は外面が淡黄褐色、内面が灰褐色である。外面の調整は口縁部・頸部はナデ、内面は頸部の屈曲付近までヘラケズリとなっている。胎土には0.5～2mmの長石、0.5

mm程度の石英、0.5mm以下の雲母を含む。2は頸部から胴部の土器細片である。調整は外面はナデ、内面頸部の屈曲部付近までヘラケズリで、胎土は1mm程度の石英・長石、0.5mm程度の雲母を含む。3は頸部から胴部の土器片である。復原口縁径は17～18cm程度で、頸部直下に列点文を約7mmの間隔で施している。色調は黄褐色で、胎土に0.5mm程度の雲母、0.5～1mmの長石を含む。調整は外面がナデ、内面は主にナデであるが、頸部付近に一部ヘラケズリが施される。4は底径が5.6cmの平底である。調整は外面がナデ、内面がヘラケズリである。胎土には1mm程度の石英・長石、0.5mm程度の雲母を含む。

これらの弥生土器細片は頸部が屈曲し、口縁端部が上下方向へ拡張している。さらに、内面の調整は頸部の屈曲する付近にまでヘラケズリが施される。これらの特徴から、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。（脇山・今福）

（2）その他の遺物（第11図、図版第8b）

今年度の調査では銅銭が1点出土した。調査区外のp調査区南西端より1.45m南西付近で表採した。銭径2.5cm・銭厚1.8mm・重さ2.3gである。銅質と鋳上がりはともに悪い。色調は褐色を呈する。銭種は「寛永通宝」（1636年初鋳）であり、背文に「文」の字が鋳出される「文銭（寛文期亀戸銭）」（1668年初鋳）である（鈴木 1999）。（小森）

9. 調査の成果

今年度は1号墓南側をn調査区、1号墓北西側をp調査区、2号墓北側をl調査区、2号墓南西側をo調査区、1・2号墓間をm調査区と設定して、1・2号墓の築造当初の墳丘形

態・規模・構造を確定するための調査を行った。

1・2号墓の墳丘 1号墓は北と南に設定したm・n調査区からそれぞれ周溝SD02・SD03を検出したことによって、南北約17.2m・高さ約1.4～1.7mの規模と推定できた。さらに1号墓北西側のp調査区において盛土を検出したことにより、西側の墳丘裾部を確認することができた。東側の墳丘裾部については、西側の墳丘裾部の標高や測量図および試掘調査時の情報から判断し、1号墓は東西約12.6mと推測した。1号墓の形状は墳丘隅部を検出できていないため、四隅突出型墳丘墓かどうかは判断できない。なおSD02とSD03の墳丘側の掘形肩部の標高はそれぞれ305.1m・305.3mであり、ほぼ同じ標高であることが確認できた。したがって、1号墓の周溝は、305.2m前後の標高に沿ってめぐっている可能性が考えられる。ただし、佐田谷・佐田峠墳墓群の多くの墳墓は部分的な周溝であることから、1号墓についても部分的な周溝ではないかと推測する。また墳丘南側からは礫を全く検出していないものの、北側では試掘調査の際に墳丘斜面上方から数点の礫を検出しており、1号墓はわずかに貼石が施された墳丘墓の可能性はある。

2号墓では、試掘調査時に検出されていた墳丘南西隅部と周溝SD04を再確認した。その結果、墳丘南西隅部は突出しておらず、おそらく四隅突出型墳丘墓ではなく、方形を呈する墳丘墓（方形台状墓）であることが考えられる。部分的な調査の段階ではあるが、墳丘規模は1調査区の周溝SD01、m調査区のSD02、o調査区のSD04の検出によって、東西約15.0m、南北約14.4m、高さ約0.6～2.0mと推定できた。なお墳丘北側はSD01の土層堆積状況の観察によって一部削平を受けていると判断している。2号墓墳丘上方およびSD01内やその周辺で礫を確認しており、2号墓も貼石がわずかに施された墳丘墓の可能性が考えられる。周溝はSD04が途中で収束していること、SD01とSD02とでは1m以上の標高差があることから、墳丘周囲に周溝が全周していないものと推測できる。なお、SD04底面で検出した焼土坑SX05は放射性炭素の年代測定によって7世紀中葉から8世紀初頭という実年代幅を得たことにより、SD04は後世に一部改変を受けている可能性も考えられる。

1・2号墓の墳丘長幅比 1・2号墓の墳丘形態について検討するために、佐田谷・佐田峠墳墓群内の様相を述べると、弥生時代中期末葉から後期初頭の佐田峠3号墓は、東西に長い墳丘形態を呈しており墳丘の長幅比は大きい。後期前葉の佐田谷1号墓は東西に長いものの佐田峠3号墓と比べ長幅比は小さくなる。今回調査を行った佐田峠1・2号墓も長幅比が小さく、佐田谷1号墓に近い形態であることから、佐田峠1・2号墓の墳丘形状は後期初頭の特徴をもつものと考えられる。

1・2号墓の前後関係 築造の時期差については、両墳墓を区画するSD02において切り合い関係が認められなかったため、両墳墓はあまり時期を置かないうちに築造されたと考えられる。ただし、SD02の最下層である第5層が1号墓よりも偏って堆積する状況から、1号墓のほうが先に築造された可能性も指摘しておきたい。

弥生土器 今年度の調査では佐田峠墳墓群1・2号墓に伴う遺物は出土しなかったが、平成9年度の庄原市教育委員会の試掘調査では、1・2号墓から弥生土器細片が出土している。

これらの土器は、口縁端部が上下方向へ拡張し、内面の調整は頸部の屈曲付近までヘラケズリを施す特徴をもつ。このことから、佐田峠1・2号墓は弥生時代後期前葉を中心に造営されたと考えられる。なお、これらの弥生土器片に類似する資料には田尻山1号墓出土のものがあげられる。

土器配置 佐田谷・佐田峠墳墓群における弥生土器の土器配置をみると、周溝内に置かれたものには中期末葉前後の佐田峠4号墓、墳丘上に置かれたものには中期末から後期初頭の佐田峠3号墓や後期初頭の佐田谷1号墓のものがある。当該地域では後期になると、土器は墳丘墓墳上からの出土が増加すると指摘されている（古屋 2007）。佐田峠1・2号墓では、試掘調査時に弥生土器細片が1号墓および2号墓墳丘南西周溝隅から50点以上出土しているものの細片となっており本来の位置をとどめていない可能性がある。さらに、今回の調査では周溝から全く土器片が出土していない。これらのことから、試掘調査時に出土した弥生土器もその多くは墳頂付近から転落した土器の可能性が高いものと推測する。

最後に、佐田谷・佐田峠墳墓群の造営時期を確認すると、昨年度までの調査によって、佐田峠3号墓は弥生時代中期末葉から後期初頭の四隅突出型墳丘墓、佐田峠4号墓は中期末葉前後の四隅突出型墳丘墓、佐田峠5号墓は中期末葉の方形周溝墓と想定することができた。佐田谷墳墓群については、佐田谷1号墓は弥生時代後期初頭、佐田谷3号墓は弥生土器細片より中期後葉の可能性はある。したがって、両墳墓群はすでに中期後葉には造墓活動が始まり、中期後葉から後期前葉にかけて佐田谷3号墓・佐田峠4号墳・佐田峠5号墓→佐田峠3号墓→佐田谷1号墓→佐田峠1・2号墓という順で造営された可能性が高いことが判明した。両墳墓群においては、四隅突出型墳丘墓と方形台状墓がともに途切れずに造営されるという複雑な造墓活動を呈していたことを想像することができるなど、佐田谷・佐田峠墳墓群は弥生墳丘墓の発展の様相を知ることのできる重要な遺跡であるといえよう。（野島・脇山）

なお、本報告は『四隅突出型墳丘墓の発達に関する考古学的研究』の科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号23520922〈研究代表者：野島永〉）による。

註

- (1) 周辺の遺跡については野島・石貫・小林・辻村・宮岡 2009文献を参考にさせていただきたい。
- (2) 石貫・斎藤 2008文献、野島・石貫・小林・辻村・宮岡 2009文献、野島・矢部 2010文献、野島・脇山・斎藤・津田・今津・谷口・横山 2011文献を参考にさせていただきたい。
- (3) 事前に測量杭の確認を行ったところ、P. 20・P. 21・P. 22・P. 26の測量杭（木製杭）は確認できなかった。
- (4) 調査参加者は以下のとおりである。本概要報告については大学院生による分担執筆を行なった。

広島大学大学院博士課程後期生：脇山佳奈

広島大学大学院博士課程前期生：今福拓哉・小森由佳利

広島大学学部生：市川伯博・関内由衣・中神恵美・森本卓馬・森本直人・赤木智香・上利碧月・川添敦史・戸川貴大・中田南美・林 美和・三輪剛史・山本晃弘

- (5) 土層に番号をつけるにあたり、1 調査区では西壁、m 調査区では西壁、n 調査区では西壁の層序をそれぞれ基準とした。他の壁面で新しく確認した層には、その続きの番号をつけることとした。したがって、例えば 1 調査区第 1 層、第 2 層といった 1 つの層番号は 1 調査区では同一の層であるが、m および n 調査区の第 1 層、第 2 層とは同一の層ではない。それらの層序番号が堆積の順序を示しているわけではない。o 調査区では東壁、p 調査区では東壁の層序をそれぞれ基準とした。o・p 調査区は接続する調査区となったため、o・p 調査区では層序の番号を統一している。
- (6) (5) に同じ。
- (7) 年代測定は (株)パレオ・ラボに依頼した。
- (8) 番号は採集の順番を示す。No. 5・6 は比較的大きい資料である。測定結果は以下に示す通りである。

放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-19515 佐田峠墳墓群 1 号墓 SX05 試料No. 5	-24.24 $\pm$ 0.14	1316 $\pm$ 19	1315 $\pm$ 20	662AD (56.9%) 690AD 752AD (11.3%) 762AD	657AD (75.4%) 715AD 744AD (20.0%) 769AD
PLD-19516 佐田峠墳墓群 1 号墓 SX05 試料No. 6	-23.83 $\pm$ 0.14	1315 $\pm$ 19	1315 $\pm$ 20	662AD (56.1%) 690AD 751AD (12.1%) 762AD	657AD (74.6%) 715AD 744AD (20.8%) 769AD

- (9) (5) に同じ。
- (10) 2 号墓西隅の周溝 (7 T) では土器細片 3 点、1 調査区では土器細片約 20 点、1 号墓試掘に伴う土器細片は 50 点以上が出土している。図化する最も大きなものを今回紹介した。ただし「1 号墓試掘出土」と記録されているものは、どの試掘調査区に伴うものかは不明である。

引用・参考文献

- 池淵俊一 2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、117～143頁。
- 石貫弘泰・斉藤 礼 2008 「佐田峠墳墓群 (第 1 次) 調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、34～36頁。
- 稲垣寿彦編 1999 『妙見山遺跡』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦編 2000 『広島県史跡 唐櫃古墳』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦編 2001 『和田原 C 地点遺跡発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦・今西隆行編 2004 「和田原 E 地点遺跡・小和田横穴墓」『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦・今西隆行 2005 『広島県史跡唐櫃古墳整備事業報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 落田正弘 1996 『陣山遺跡』三次市教育委員会。
- 桑原隆博 1982a 「小和田遺跡」『西山・小和田・永宗一国道 183 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、31～50頁。
- 桑原隆博 1982b 「西山遺跡」『西山・小和田・永宗一国道 183 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、9～30頁。
- 沢元保夫 1982 「永宗遺跡」『西山・小和田・永宗一国道 183 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、51～70頁。
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会。

- 妹尾周三 1986 「江ノ川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会－佐田谷1号墓の調査とその意義を中心として－」『芸備』第17集、17～34頁。
- 妹尾周三編 1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 妹尾周三 1996 「佐田谷墳墓群の調査」『芸備』第25集、10～19頁。
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会。
- 野島 永 2008 「佐田峠墳墓群2007年度の調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、1～3頁。
- 野島 永・石貫弘泰・小林昂博・辻村哲農・宮岡昌宣 2009 「佐田峠墳墓群（第2次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXIII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～52頁。
- 野島 永・矢部俊一 2010 「佐田峠墳墓群（第3次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXIV、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～39頁。
- 野島 永・脇山佳奈・齋藤友紀・津田真琴・今津和也・谷口早季・横山瑛一 2011 「佐田峠墳墓群（第4次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXV、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～38頁。
- 藤田広幸 1988 『和田原遺跡』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第68集 広島県埋蔵文化財調査センター。
- 古屋紀之 2007 『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣。
- 松井和幸編 1999 『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第186集、簡易保険福祉事業財団・庄原市教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。
- 渡辺貞幸 2003 「四隅突出型弥生墳丘墓の「突出部」『新世紀の考古学－大塚初重先生喜寿記念論文集－』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会、219～234頁。
- 渡辺貞幸 2007 「まとめにかえて－四隅突出型墳丘墓概説－」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、199～205頁。

付表1 佐田峠1・2号墓土層観察表

I調査区(第7図1)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	-	表土
第2層	にぶい黄褐色	10YR4/3	弱	やや強	砂質土層をベースとする。	自然堆積土
第3層	にぶい黄褐色	10YR4/3	弱	弱	シルト質土で径1mm程度の粗砂を5%程度含む。	SD01埋土
第4層	褐色	10YR4/4	弱	弱	シルト質土をベースとし、砂はほとんど含まない。	SD01埋土
第5層	暗褐色土	10YR3/4	弱	弱	シルト質土をベースとし、砂はほとんど含まない。	SD01埋土
第6層	暗褐色土	10YR3/4	やや強	強	粘土質土をベースとし、砂はほとんど含まない。	SD01初期流土
第7層	暗褐色土	10YR2/2	強	強	粘土質土をベースとし径1mm程度の粗砂を5%程度含む。	SD01初期流土

m調査区(第7図2)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	-	表土
第2層	黒褐色土	10YR3/3	弱	弱	砂質土をベースとする。o調査区第3層に対応する。	SD02埋土
第3層	黒褐色土	10YR2/3	やや強	弱	シルト質土をベースとし砂はほとんど含まない。北側はやや厚く堆積する。o調査区第4層に対応する。	SD02埋土
第4層	暗褐色土	7.5YR3/2	弱	強	粘土質土をベースとし砂はほとんど含まない。一部黒色土を含む。南側は比較的厚く堆積する。	SD02埋土
第5層	黒色土	10YR2/1	やや強	強	シルト質土であり砂はほとんど含まない。クロボク土を多く含む。	SD02埋土
第6層	褐色土	10YR4/4	弱	強	シルト質土であり砂はほとんど含まない。地山直上に堆積する。	2号墓盛土
第7層	黒褐色土	7.5YR3/2	やや強	強	粘土質土であり砂はほとんど含まない。表土直下の層であり一部根の攪乱を受ける。	1号墓盛土
第8層	暗褐色土	10YR3/3	強	強	粘土質土であり砂はほとんど含まない。地山直上に堆積する。	1号墓盛土

n調査区(第7図5)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	-	表土
第2層	暗褐色土	7.5YR3/3	弱	弱	砂質土をベースとし、径2～3mmの礫を5%程度含む。	SD03埋土
第3層	暗褐色土	7.5YR3/3	弱	弱	シルト質土をベースとし、径3mm程度の橙褐色の礫を10%程度含む。	SD03埋土
第4層	黒褐色土	7.5YR3/2	弱	弱	シルト質土をベースとし、径2mm程度の橙褐色のクサレ礫を1%程度含む。クロボク土を多く含む。	SD03埋土
第5層	褐色土	7.5YR4/4	強	強	シルト質土をベースとし、径1mmの橙褐色の粗砂を3%程度含む。地山直上の盛土。	1号墓盛土

o・p調査区(第7図3・4・6)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	-	表土
第2層	-	-	-	-	-	試掘埋戻し土
第3層	褐色土	10YR4/4	弱	弱	砂質土、木の根による攪乱を受ける。m調査区第2層と対応する。	SD04埋土
第4層	褐色土	10YR4/4	強	弱	シルト質土をベースとし砂はほとんど含まない。m調査区第3層と対応する。	SD04埋土
第5層	黒褐色土	10YR2/3	弱	弱	シルト質土であり、径2～5mmの礫をやや含む。炭化物と焼土をやや含む。	SD04埋土
第6層	暗褐色土	10YR3/3	弱	弱	砂質土をベースとし炭化物とを多く含む、焼土を含む、径2～3mmの礫を5%程度含む。	SX05埋土
第7層	暗褐色土	10YR3/3	弱	弱	シルト質土であり、炭化物を多く含む、焼土を含む。	SX05埋土
第8層	黒褐色土	10YR3/1	弱	弱	シルト質土であり、5～20mmの炭化物を多く含む、焼土を含む。	SX05埋土
第9層	褐色土	10YR4/3	強	強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。	1号墓盛土
第10層	褐色土	10YR4/4	強	やや強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。	1号墓盛土
第11層	暗褐色土	10YR3/4	強	強	粘土質土をベースとし、径0.1mmの細砂を5%程度含む。	1号墓盛土
第12層	暗褐色土	10YR3/4	強	やや弱	粘土質土であり、木の根による攪乱を一部受けている。	1号墓盛土
第13層	褐色土	10YR4/4	強	やや強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。	1号墓盛土
第14層	褐色土	7.5YR4/3	弱	弱	砂質土であり、グライ化した土をブロック状に含む。地山土が一部流入していると考えられる。	自然堆積土
第15層	褐色土	7.5YR4/3	弱	強	シルト質土であり、径0.1mm程度の黒色の細砂を5%程度含む。	1号墓盛土
第16層	褐色土	10YR4/4	強	強	シルト質土であり、表土下の層であり一部に木の根の攪乱を受ける。	1号墓盛土
第17層	褐色土	10YR4/4	強	やや強	シルト質土であり、一部黄褐色土を含んでいる。	1号墓盛土
第18層	褐色土	7.5YR4/3	弱	弱	砂質土をベースとする。	自然堆積土
第19層	褐色土	10YR4/4	強	強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。	2号墓盛土

